〔駒沢女子大学　研究紀要　第14号　ｐ.131～140　2007〕

アーラヤ識の存在証明
――『秘義分別摂疏』の考察（８）――

千　葉　公　慈

Existence Proof of Ālaya-vijñāna
―― A Study about *Vivṛtaguhyārthapiṇḍavyākhyā* (8) ――

Koji CHIBA

１．問題の提起――因果の観察を止揚する思想

本稿は、インドの瑜伽行唯識学派における代表的典籍である『摂大乗論』(Mahāyāna-saṃgraha、以下 MS と略称）に対する重要な注釈書、『秘義分別摂疏』(Vivṛtaguhyārthapiṇḍa-vyākhyā*[1]、以下 VGPV と略称)を考察の対象とするものである。すなわち唯識学派におけるアーラヤ識設定の隠された意味とその思想を開示せしめる貴重な手がかりを探るために VGPV に関するチベット語訳デルゲ版（No. 4052）を底本として選択し、既に７回にわたる現代語訳*[2] を試みたその続編である。

前回の拙論において扱った内容は、かくしてアーラヤ識設定が大乗として公認されるべきという主張から、従来の縁起思想を読み替えるという重要な作業を暗示するものであった。すなわちこれを密意として捉えるならば、VGPV の著者が属する思想系譜の特質とは、従来の十二縁起説を劣位なる見解と見做し、真実にはアーラヤ識縁起説こそ優位に立つという主張である。具体的には MS 第１章の第19節において二種の縁起説が説かれている（Lamotte ed, p. 11）が、「他のもの」と表現する程度に十二縁起説を表現しており、VGPV で説く縁起思想にとっては、従来の十二縁起説はアーラヤ識縁起とは「別なもの」という程度の表現に過ぎない存在であ

*1　Don gsang ba rnam par phye ba bsdus te bshad pa（Vivṛtaguhyārthapiṇḍavyākhyā）：Vivṛtti-in Derge ed. Vivṛta-in Peking ed.

*2　拙論「『秘義分別摂疏』覚え書（１）」駒沢女子大学研究紀要・第８号所収、pp. 209-216
同「『秘義分別摂疏』覚え書（２）」日本文化研究（駒沢女子大学日本文化研究所）・第４号所収、pp. 117-131
同「如来の所分別についての一考察―『秘義分別摂疏』覚え書（３）」駒沢女子大学研究紀要・第９号所収、pp. 199-210
同「『秘義分別摂疏』における真如観について」平成15年度日本印度学仏教学会第54回学術大会（佛教大学）、2003.9.6、『印度学仏教学研究』第52巻所収。pp. 373-376
同「所分別と三昧についての一考察―『秘義分別摂疏』覚え書（４）」駒沢女子短期大学研究紀要・第37号所収、pp. 79-85
同「唯識説における Buddha-vacanatva について―『秘義分別摂疏』の考察（５）―」駒沢女子大学研究紀要・第11号所収、pp. 131-140
同「『秘義分別摂疏』の考察（６）―」駒沢女子大学研究紀要・第12号所収、pp. 107-117
同「アーラヤ識縁起説における増益と損減―『秘義分別摂疏』の考察（７）―」駒沢女子大学研究紀要・第13号所収、pp. 167-175

り、こうした軽視こそ VGPV の著者に関する思想的特徴が読み取れる箇所でもあった。提示すれば以下の通りである。

rten ci pa ‘brel par ’byung ba la mkhas par*3 zhes bya ba ni sdug pa*4 dang mi sdug pa’i ’gro ba*5 rnam par ’byed ba dang nye bar spyod pa*6 pa’i rjen cing ’brel bar [b-5] ’byung ba bstan pa’i phyir ro. rgyul mkhas pa zhes bya ba smos ba ni ngo bo nyid rnam par ’byed pa pa’i rten cing ’brel par ’byung ba rab tu bstan pa’i phyir te. ’dir yang gzhen la mkhas pa ni ngo bo nyid rnam par ’byed pa pa’i rten cing ’brel par ’byung ba mkhas pa sngon du ’gro ba cad yin pa’i phyir rten cing ’brel par ’byung ba la mkhas par phyis bstan to. de’i ’og tu rten cing ’brel par ’byung ba la mkhas na chos rnams kyi mtshan nyid la ’jug par nus bas shes bya’i mtshan nyid bstan to. (VGPV：303-b-5～6)

［MS 第 5 章の第 1 節において］「縁起に対して熟練［すべき］」と説かれたことについて言えば、愛と非愛との趣*7 を詳細に分析し、享受する (upabhoga)［主体者側の］縁起が示されるからである。「因に対して通暁する」と言われるものが［MS に］説かれたことについて言えば、自性に対して［詳細に］分別する者 (svabhāva-vibhāvika) の側［にとって］の縁起が明らかに示すためであり、ここでさらに［MS 第 2 章として］他のものについての熟練知［が説かれていることについて言えば、それ］は自性を詳細に分析している縁起（アーラヤ識縁起説）に関する熟練知が［従来の十二縁起説に関する熟練知よりも］先行する［ものとして説かれている］のであるから、故に［十二］縁起についての熟練知として［アーラヤ識縁起説の］後に示されたのである。それ（アーラヤ識）に続いて縁起について通暁するならば、諸法の特質に悟入することが出来るのであるから、「知られるべきものの特質」［としてアーラヤ識］が示されるのである。（下線は筆者による。）

2．依他起の重視へ

こうして従来の十二縁起説とアーラヤ識縁起説の両者のうち、明確に後者の思想重視が明らかとなったが、この傾向が空性を証明するための諸法を受容する基盤について文字通り容認し、空性の絶対化に拍車を掛けることになる。すなわちアーラヤ識を依他起性と同質化せしめることによって、諸法の実体を場所でサポートするシステムが構築されるのである。

gzhan gyi dbang la skur pa ’debs pa ni bdag nyid thams cad du gdags pa’i gzhi spang ba’i phyir ro. (VGPV：303-b-7)

依他起［性］に関して損減することは、

*3 par...bya in Pek ed.
*4 sdug pa...iṣṭa-gati
*5 mi sdug pa’i’gro ba...dur-gati
*6 nye bar spyod pa...upabhoga
*7 善趣と悪趣。可愛趣と非愛趣。

［過失である。何故ならば］あらゆる本体として［我が］仮設（設定）されている*8 ところの基盤（アーラヤ識）［まで］をも断じてしまうからである。

この箇所から推測すれば、VGPV の著者自身は明らかに安慧（スティラマティ：Sthiramati、470～550年頃）とは別な系譜であることが判明する。これを補足すると思われるのが「定義」に関する以下の箇所である。

gal te rten cing ’brel par ’byung ba dag la sgro ’dogs pa dang［304-b-2］skur ba ’debs bspangs pa nyid kyis mtshan myid la mkhas pa yin na brtags pa dang yongs su grub pa dag la mkhas pa go skabs su ci ’bab ste*9. gcig ni med pa nyid kyis rten cing ’brel par ’byung ba ma yin pa’i phyir la. cig shos de bzhin nyid kyi mtshan nyid kyang rtag pa’i*10 phyir ro. zhe na de ni ma yin te. mtshan nyid la mkhas pa zhes bshad pa mtshan nyid ni ’dis mtshon pas na gzhan gyi dbang la kun brtags pa dang yong su grub pa tin te. ’ding ltar sems can ma dag pa rnams kyis ni brtags pa’i bdag nyid du dag pa rnams kyis ni bdag med pa’i bdag nyid du mtshon to. gzhan gyi dbang rang nyid ni mtshon par bya ba*11 yin pas na mtshan nyid de de nyid sbyar bar bya’o.（VGPV：304-b-1～4）

もしも諸々の縁起において増益と損減が正に断じられることによって、［諸法の］特質について熟練するのであるならば、遍計所執［性］と円成実［性］の両者について熟練することを扱う箇所としては、一体どのような状況に当てはまるのかと言えば、一つ（遍計所執性）は非存在性によって縁起ではないからであり、他方、真如の特質（円成実性）も常住（永久）だからである、と［論難者が］言うならば、それは［適当］ではないのである。何故ならば［MS に］「特質について熟練すること」と言って説かれる「特質」とは、これ（特質それ自体）によって定義づけられるものであるからである。［したがって］依他起［性というある場所］において遍計所執［性が存在するか否かで依他起性自身が定義づけられるの］であり、円成実［性が存在するか否かで依他起性自身が定義づけられる］ということなのである。何故ならば、諸々の不浄なる衆生によっては遍計所執性として［定義づけられ、あるいは諸々の衆生が］清浄であることなどによっては無我を本質とするものとして［明確に三性のうちの遍計所執性と円成実性とによって］特徴づけるのである。［したがって］依他起［性］それ自身は特質づけられるべきものであるから、か（前文）の定義は真如と結びつけられ［て定義され］るべきものである。

すなわち「定義は定義自身によって定義づけられる」という立場から“mtshon pa”は「定

*8　我たるもの、本性的なものとしてアーラヤ識が重視されている箇所。
*9　skabs su ci ’bab ste...skabs bab（vi）、及時。当前。到時。一体どういうテーマが何という箇所に相当するのかというならば、という意味。VGPV：299-a-6参照。
*10　rtag pa...nitya
*11　mtshon par bya ba...lakṣya

義づけるもの」、“mtshan nyid” は「定義づけられるもの」として「定義するその対象」となるから、遍計所執性と円成実性とが定義づける対象となり、依他起性は定義づけそのものの証明基盤という関係になる。つまり依他起性は遍計所執性と円成実性の二自性とは明確に区別されて、定義づけの場所として絶対視すべきであることの格付けが行われている。おそらくこうした論理展開がアーラヤ識縁起の優越的な思想構造を導くのであり、因果を観察するための縁起説自身が因果を収斂する特質を有することによって三性説の定義が初めて理解出来るのである。

以上の論理展開における問題点をさらに究明するため、その後に続く試訳を以下に提示する。

3．VGPV 試訳

凡　例

1）試訳の底本は以下のデルゲ版を使用し、補足的に必要に応じて北京版を利用した。
Der. ed., No. 4052, Ri, 296-b-1～361-a-7
：Tibetan Tripiṭtaka, bstan ’gyur, preserved at the Faculty of Letters, University of Tokyo,
SENMS TSAM Vol. 12, 通帙第236（Ri）
Pek, ed., No. 5553, Li, 356-b-7～434-a-8

2）固有名詞ならびに通常音写語として用いられる術語は、カタカナ表記とする。

3）本書のテキスト MS 中にて言及されている部分は、「　」によって示した。

4）重要な術語は、(　　)によってチベット訳を示した。また未確認ではあるが、おそらく誤りではなかろうと思われる還元のサンスクリット語についても、正確な文脈を把握するため、同様に（　　）によって示した。

5）原文にはないが、補った方が理解に便と思われる言葉は［　　］によって示した。

6）典籍一般は、『　　』によって示した。

7）なるべく原文に忠実な直訳を試み、日本語として不自然な文章箇所も［　　］によって整え、敢えてそのままの表現を残した。

［from Der. ed, No. 4052, Ri, 304-b-7 Pek. ed, No. 5553, Li, 366-b-8］

【1】増益と損減に関する誤った見解

［我ら唯識派が四重二諦説において、真実のままに増益と損減を断じる場合に］他の者達は［以下の通りに主張する。すなわち］蘊など［十二処十八界］である諸々の縁起に対して、楽や苦や迷妄なることの変貌など、そういった［遍計された］ものとして増益される［自性の存在である］から増益なのである。［その意味で自性としての］我は完全に（本質的に）無であると理解されるから損減なのである、として［彼の他の者達は］言語表現するのであって遍計所執性などの三自性［説］と結びつけられて［増益と損減を理解して］いることに基づく［主張］ではないのである。

【2】二種の善巧

［本文である MS 序章の第 5 節第 3 項において*12］「証得（通暁）することを得た」［ことによる階位の獲得］において、第 1 の善巧については功徳（徳性、anuśaṃsa）である縁起に対して熟練することであるが、第 2［の善巧］についても二辺を断ずることに対する熟練ではないのか、［と反駁者は批判するかも知れない。］あ

*12 より正確には MS 第 5 章の第 3 節における「諸階位（地）の獲得」を見るべき四種のうちの 3 番目の記述に相当する。

るいは善巧とは［認識対象を］知ることであるのだから、それ自体を証得するもの［という意味］ではないのか、［と反駁者はさらに批判するかも知れないだろう。これに関して］言えば、それ（答え）は否である。［何故ならば］善巧とは勝解行［地］における聞所成と思所成と修所成が有漏［の智］であるとして［MSの著者アサンガ尊者は］ご承認になられるのであるが、証得（通暁）することとは無漏の智なのである［からである］*13。

【3】四善根から金剛喩三昧に至るまで

［MS序章の第5節第3項後半部分において］「それによって諸々の障礙より云々」について言えば、［加行位のうちの］煖位（uṣma-gata）においては、［六］波羅蜜の所対治である慳等を伏滅（制圧）する断によって、ただ現起することが無くなっただけの解脱であって、何故ならばそれら（煖位において）は修習によって断ぜられるべきだからである。頂と忍と世法第一法の階位（地）においては、［哲学的な］見解によって断ぜられるべき（見所断の）煩悩障と所知障という遍計所執［性］を伏滅（制圧）する解脱なのである。見道の段階（地）においては、［煩悩障と所知障の］両方とも障礙の種子を［ことごとく］断滅することが解脱なのである。それ以降の「金剛喩三昧」に至るまでは、所知障の種子の俱生を漸次に断滅するのであって、身見と辺執見の俱生という①意識と②意識に相応するものの両者は、第四地において完全に伏滅（制圧）されるのである。それとは異なるもの、すなわち貪・瞋・痴等は、完全に抑えつけられることであり*14、染汚意（汚れたマナス）は第八地において抑えつけられるのである。一切の種子と煩悩によって［一切種子識に］投げ込まれた熏習は、「金剛喩三昧」によって同時に（一時に）あまねく滅除されるのである*15。

【4】六波羅蜜を包括する基盤

［MS序章の第5節第4項後半部分において*16］「増上なる意楽（意向、adhy-āśaya）が清浄になることに依存して云々」*17と示されることについて言えば、『十地経』は一途な思考の傾向性等々による［ことを示している］のである。

［続くMSの箇所に］「先に加行を有して云々」とは、ひとつの相続であるから、故にかくの如く表現されるのであって、およそ何であれ原因となるものであれば、それは証得（通暁）という観点から証明されるべきなのである。証得として証明することもまた、［六］波羅蜜の所対治（vipakṣa）たる慳等々の種子が除滅されることと、そして三輪が清浄になることによって、ことごとく摂せられるという観点から、六波羅蜜が障礙無きものとして働くこと、およそそのこと［が証得としての証明なので］である。

その次には、清浄なる増上意楽を因として十地の特質の修習を類別することであるから、それが［5番目のテーマとして］示されるのである。それがまた到来するのは、二つの阿僧祇劫

*13 唯識派に反駁する者たちにとっては、証得あるいは通暁とは熟練して知り尽くすことであるのだから、そのこと自体が智慧ということではないのか、というごく自然な疑問がある。ここではそれに応答して、証得あるいは通暁には有漏と無漏の二種の智があるのだと説明している。

*14 ここのdangは、並列なのか接続なのか不明。ひとまず接続詞として解釈した。

*15 これらの熏習は、即刻全滅してしまうとの意。

*16 より正確にはMS第4章の第1節、答えの第2であり、さらにはその詳細なる考察部分である第4章第2節に相当する。

*17 「増上意楽が清浄なること」とは、何でも受け容れる基盤としての信（adhimukti）が清らかになることを指す。長尾前掲書、下、p. 112参照。なおadhimuktiに関する問題は、拙論「唯識説における「信」について」駒澤大学大学院仏教学研究年報、第24号、pp. 2～10参照。

(asamkhyeya-kalpa) によるものではあると雖も、むしろ三つの［阿僧祇劫］そのものが、そこで完成するのであるから、［したがって本文に］「三阿僧祇劫にわたって」*18 と説かれるのである。

【5】三学と大乗の完成

［本文の第6項から第8項にかけて、三］学が完全に成就することは、地によるものであるから、その後に三学があるのであって、すなわちこれらの内的な次第は先述の通りである*19。残り［第9節と第10節］の次第も先述の通りである。

［本文 MS 序章の第5節最終箇所に］「一切の大乗は完成するのである」と言われることは、把握対象等の区別はどのような説明の通りなのか、という観点から［説明されているの］である。

以上は十種の［テーマを］経典に要約して詳しく説明したものであり、更なる詳細に［ついて］は、これより以下に示すものである。

【6】四種の視点とアーラヤ識

そこでまた同義語と自相と論理と類別との四つのあり方が詳しく説かれるべきであって、聴聞者たちによって分析し、理解されるべきであるから、まず最初にかだ同義語だけが些か説明されるのである。その次に言語表現されるべきものと認められる諸々の人々において論じるのである。それ自体の特質［として自相］が完全に成立されるべきであるがために、論理が増長されるのである。論理によって証明されたことは、自らの学説の中で確立（安立）されるべきであるから、類別があるのである。

同義語においてもまた、四種類に区別されるのであって、すなわち①大乗独自のもの（不共大乗）、②声聞乗および大乗と共通するもの、③声聞乗独自のもの、④その論難（議論）とである。そのうち論難（議論）とは［次の通り］である。すなわち生起する［活動的で表面的な］認識の相続において、アーラヤ識と言われるものについての同義語*20 であるのか、あるいはそれ（アーラヤ識）と異なるものであるのか、という［論難］である。そこで今しばらく、同義語を最初の主題となして、［MS 第1章第1節にて］「世尊によってアーラヤ識［を知られるべきものの拠り所］とすることによって、アーラヤ識なるものは［世尊は］どこで［説かれたのか、そしてどこでアーラヤ識という名称を用いて説かれたのか］云々*21」と言われたのである*22。ここでは［この論難である］質問の答えが説明されるであろうことと言葉を結びつけて考えるならば、この質問者は大乗の学無き者（愚鈍者）*23 であるということは明確なのであって、何故ならば［かのアサンガ尊者は］質問の意味を『阿毘達磨大乗経』が述べられることによって確認なさっておられるのである。しかしもしもある経典（nikāya）のあるものを［アーラヤ

*18 より正確には MS 第5章の第6節、三阿僧祇劫の修行に関する記述の総括部分。

*19 Vi：303-a-7～303-b-2の箇所と思われる。したがって後文の「先述の通り」もこの続く箇所か。

*20 MS 第1章第11節 A 項にてアーラヤ識が声聞乗の教説中の同義語として説明されている。

*21 MS によれば「世尊は『阿毘達磨大乗経』において説かれた」と説明し、次なる偈頌が提示されている。ただしこの部分は『唯識三十頌論』中に引用されているため、サンスクリットの回収が可能となっている。長尾雅人『摂大乗論・和訳と注解・上』インド古典叢書、講談社、昭和57年、p. 75～76参照。

*22 Étienne Lamotto ed, *LA SOMME DU GRAND VÉHICULE D'ASA ṆGA* (MS), TOME 1, UNIVERSITÉ DE LOUVAIN INSTITUT ORIENTALISTE LOUVAIN-LA-NEUVE, 1973, p. 4, ll. 4～5

*23 theg pa chen po pa mi mkhas pa zhig となっているが、文脈から theg pa chen po la mi mkhas pa zhig とした。ちなみに北京版も theg pa chen po pa となっている。

識の説かれた場所として］問うならば、むしろ［我々唯識派にとっては］過失は無いのである。何故ならば判断根拠（pramāṇa）によって大乗は仏説であると［既に］主張をなしているからである。あるいはまた、［著者としての］アサンガ尊者ご自身によって、未来の人々において見られるのであって、論師ご自身が請問されてお答えになられるのである。

【7】アーラヤ識の存在証明

［MS 第 1 章第 1 節の偈頌にて］「無始時来（anādikālika）［の界（dhātu）］云々」*24 とは、ここでもまたアーラヤ識と言われるこの同義語について問うならば、「知られるべきものの拠り所」と言われる語が、［アーラヤ識こそが］一切法の拠り所（sarva-dharma-dhātu、あらゆる存在の基因）であるものそれ自体として［アサンガ尊者は］お示しになったのであり、アーラヤ識そのものを［直接的に］問うているならば、それも問いがなされているとお考えになっているからである。それ故にこれは［MS 冒頭のアーラヤ識そのものを問う］箇所としては相当しないのではない*25 が、［アーラヤ識を扱う］箇所として相当するのである*26。（未完）

4．VGPV 蔵文

［from Der. ed, No. 4052, Ri, 304-b-7 Pek. ed, No. 5553, Li, 366-b-8］

【1】

“gzhan dag” ni*27 phung po la sogs pa rten cing ’brel par ’byung rnams la bde ba*28 dang sdug bsngal ba*29 dang rmongs pa*30 yongs su ’gyur pa la sogs pa nyid du sgro ’dogs pa’i phyir sgro ’dogs pa’o. ［Der. ed, 305-a-1］ bdag nyid thams cad du med par rtogs pa’i phyir*31 skur pa ’debs pa’o zhes brdzod de. brtags pa la sogs pa ngo po nyid gsum dang sbyor bas ni ma yin no.

【2】

［MS：§5-3)］“rtogs par bya ste” zhes bya ba la sogs pa la mkhas pa dang po la*32 ni phan yon rten cing ’brel par ’byung ba la mkhas pa yin la gnyis pa la yang myha’ gnyis spang ba la mkhs pa ma yin nam mkhas pa ni shes pa yin pas de nyid rtogs pa yin no zhe na de ni ma yin te. mkhas pa ni mos pas sbyod pa’i*33 thos pa las byung ba*34 dang bsams pa las

*24 Étienne Lamotto ed, MS, p. 4, I. 7、長尾前掲書ではアーラヤ識の同義語として「無限の過去からの基因」と訳出されている。

*25 ニ重否定の表現となっている。

*26 すなわちアーラヤ識の同義語を質問する箇所ではあっても、アーラヤ識そのものを直接質問する箇所として当たらないというわけではなく、やはりアーラヤ識の設定の意図として当たるのである、と解釈した。あらゆる存在と時間の基盤としてアーラヤ識を位置づけており、『唯識三十頌』（Triṃśikā）が MS 第 1 章第 1 節の偈頌を引用してアーラヤ識の存在証明を行っている。これについては別稿にて言及したい。

*27 gzhan dag ni...gzhan dag ni zhes so として従来の十二縁起説理解から増益と損減について以下に説明することになるが、あくまでも伝統的解釈を gzhan dag と表現する。

*28 bde ba...sukha

*29 sdug bsngal ba...duḥkha

*30 rmongs pa...moha

*31 rtogs pa’i phyir...rtog pa’i phyir in Pek ed.

*32 mkhas pa dang po...kauśalya

*33 mos pas sbyod pa...adhimukti-caryā-bhūmi

*34 thos pa las byung ba...śruta-maya

byung ba*35 dang bsgoms pa las ng ba*36 zag pa dang bcas pa*37 yin par bzhed la rtogs pa ni zag pa med pa'i ye shes*38 yin no.

【3】

[MS : §5-3)] "des sgrib pa rnams las" zhes bya ba la sogs pa la ni de la dro ba'i gnas skabs na*39 ni pha rol tu phyin pa'i*40 mi mthun pa'i phyogs*41 ser sna*42 la sogs pa rnam par gnon pa'i spod bas kun du*43 mi ' byung ba tsam rnam par grol ba*44 yin te. de dag ni bsgom pas*45 spang bar bya ba yin pa' i phyir ro. rtse mo*46 dang bzod pa*47 dang chos kyi mchog*48 gi gnas skabs na ni mthong bas spang bar bya ba'i*49 nyon mongs pa'i*50 sgrib pa dang shes bya'isgrib pa kun brtags*51 pa rnam par gnon pa rnam par grol ba yin no. mthong ba'i lam*52 gyi gnas skabs na ni sgrib pa rnam pa de gnyi ga'i*53 sa bon yang dag par bcom pa*54 rnam par grol ba yin no. de yan chad rdo rze lta bu'i ting nge 'dzin*55 gyi bar du ni shes bya'isgrib pa'i sa bon lhan cig skyes pa rim gyis yang dag par 'joms te. 'jig tshogs la lta ba*56 dang mthar 'dzin par lta ba*57 lhag cig skyed pa yid kyi rnam par shes pa*58 dang mtshungs par ldan pa*59 dag ni sa bzhi pa la thams cad kyi thams cad du rnam par mnan to.de las gnas pa 'dod chags dang zhe sdang dang gti mug*60 rnams rnam pa thams casd du rnam par mnan pa dang nyon mongs pa can gyi yid*61 ni sa brgyad pa la rnam par mnan to. thams cad kyi sa bon dang nyon mongs pas 'phangs pa'i bag chags*62 ni rdo rze lta bu'i ting nge 'dzin gyis cig car kun

---

*35 bsams pa las byung ba...bhāvanā-maya
*36 bsgoms pa las ng ba...sāśrava-maya
*37 zag pa dang bcas pa...sāśrava
*38 zag pa med pa'i ye shes...anāśrava-jñāna
*39 dro ba'i gnas skabs na...uṣma-gata
*40 pha rol tu phyin pa...pāramitā
*41 mi mthun pa'i phyogs...vipakṣa
*42 ser sna...mātsarya
*43 kun du mi 'byung ba...adṛśya, kun tu mi 'byung ba in Pek ed.
*44 rnam par grol ba...vimukti
*45 bsgom pas...bsgoms pas in Pek ed.
*46 rtse mo...agra
*47 bzod pa...kṣānti
*48 chos kyi mchog... [laukikāḥ] agra-dharmāḥ
*49 mthong bas spang bar bya ba...darśana-prahātavya
*50 nyon mongs pa...kleśa
*51 kun brtags...kun brtag in Pek ed.
*52 mthong ba'i lam...darśana-mārga
*53 de gnyi ga...tad-ubhaya
*54 yang dag par bcom pa...samghāta
*55 rdo rze lta bu'i ting nge 'dzin...vajra-upama-samādhi
*56 'jig tshogs la lta ba...sat-kāya-dṛṣṭi
*57 mthar 'dzin par lta ba...anta-grāha-dṛṣṭi
*58 yid kyi rnam par shes pa...mano-vijñāna
*59 mtshungs par ldan pa...samprayukta
*60 'dod chags dang zhe sdang dang gti mug...rāga dveṣa moha
*61 nyon mongs pa can gyi yid...kliṣṭa-manas
*62 bag chags...vāsanā

nas 'joms so.

【4】

[MS : §5-4)] "lhag pa'i bsam pa dag pa la brten nas"*63 zhes bya ba ni sa bcu pa las bstan pa drang po'i bsam pa nyid la [Der. ed, 305-b-1] sogs pas so. "ngar sbyor ba can gyi"*64 shes bya ba la sogs pa ni rgyun gcig pa'i phyir de skad brjod do. rgyur gyur pa gang dag yin pa de dag rtogs pa'i sgo nas bsgrub par bya ba yin no. rtogs par bsgrub pa yang pha rol tu phyin pa'i*65 mi mthun pa'i phyogs*66 ser sna la sogs pa'i sa bon bcom pa dang 'khor gsum yongs su dag pas*67 yongs su zin pa'i sga nas*68 pha rol tu phyin pa rnams gags*69 med par 'jug pa gang yin pa'o.

[MS : §5-5)] de'i 'og tu lhag pa'i bsam pa dag pa'i rgyu can sa bcu'i mtshan nyid bsgom pa rab tu dbye ba*70 yin pas de bstan to. de yang yod ni bskal pa grangs med pa gnyis kyis yin mod kyi 'on kyang gsum nyid ni der yongs su rdzogs pa yin pas [MS : §5-5)] "grangs med pa gsum du"zhes bshad do.

【5】

[MS : §5-6), 7), 8)] bslab pa yongs su rdzogs pa ni sa la brten pa yin pa'i hyir de'i 'og tu bslab pa gsum ste. 'di dag gi nang go rims*71 ni snga ma bzhin no. lhag ma'i go rims kyang snga ma bzhin no. [§5-6)] "theg pa chen po thams cad yongs su rdzogs pa yin no" zhes bya ba ni dmigs pa la sogs pa'i bye brag ci skad bshad pa'i sgo nas so. 'di ni bcu po mdor bsdus nas rnam par bshad pa yin te. rgyas par ni 'di man chad nas ston to.

【6】

der yan rnam grangs*72 dang rang gi mtshan nyid*73 dang rigs pa*74 dang rab tu dbye ba*75 dang rnam pa bzhi rnam par bshad par bya ste. nyan pa po rnams kyis bye brag tu rtogs par bya ba'i phyir dang por rnam grangs tsam zhig bsnyad do. de'i 'og tu brjod par bya bar 'dod pa rnams la mtshan nyid brjod do. rang gi mtshan nyid rab tu grub par bya ba'i phyir rigs pa rgyas pa'o. rigs pas bsgrubs pa rang gi grub pa'i mtha'*76 la rnam par gnas par bya ba'i phyir rab tu dbye ba'o. rnam grangs la yang khyad par rnam pa bzhi ste. ① theg pa chen po'i thun mong ma yin pa*77 dang ② nyan thos kyi theg pa dang theg pa chen pothan mong pa dang ③ nyan thos kyi theg

*63 lhag pa'i bsam pa dag pa la brten nas...lhag pa'i bsam pa rnam par dag pa la brten nas in MS
*64 ngar sbyor ba can gyi...ngan sbyor ba can gyi in MS
*65 pha rol tu phyin pa'i...pha rol tu phyin pa in Pek ed.
*66 mi mthun pa'i phyogs...vipakṣa
*67 'khor gsum yongs su dag pas...tri-maṇḍala-pariśuddha
*68 sga nas...sgo nas in Pek ed.
*69 gags...gegs, vibandha
*70 rab tu dbye ba...prabheda
*71 go rims...go rim in Pek ed.
*72 rnam grangs...paryāya
*73 rang gi mtshan nyid...svalakṣana
*74 rigs pa...yukti
*75 rab tu dbye ba...praveda
*76 grub pa'i mtha'...siddhānta
*77 thun mong ma yin pa...asādhārana

pa'i thun mong ma yin pa dang ④ de'i brtsad pa'o.

de la ④ brtsad pa ni 'di yin te. ci 'jug pa'i rnam par shes pa'i rgyud la kun gzhi rnam par shes pa zhes bya bas rnam grangs shig yin nas 'on te de dang tha dad pa zhig yin zhes bya ba'o. de la [306-a-1] re zhig rnam grangs dang po'i dbang du mdzad nas "bcom rdan 'das kyis kun gzhi rnam par shes pa zhes pa stan pas kun gzhi' i rnam par shes pa gang du zhes bya ba la sogs pa smos so."*78 'dir ni 'dri ba'i lan 'chad par 'gyur ba dang sbyar na 'dri ba 'di theg pa chen po pa mi mkhas pa zhig yin par mngon te. 'di ltar dris pa'i don theg pa chen por gtogs pa'i mdo brjod pas gtan la dbab pa mdzad do.

'on te sde pa zhig 'dri na 'on kyang nyes pa med de. 'di ltar de ltar tshad mas theg pa chen po sangs rgyas kyi gsung yin par khas len du bcug pas so. yang na slob dpon nyid kyis ma 'ongs pa'i skye bo la bltas nas*79 bdag nyid kyis dris nas lan gdab pa byas pa yin no.

【7】

[MS : 1.1] "thog ma med pa'i"*80 zhes bya ba la sogs pa ni 'dir yang kun gzhi rnam par shes pa zhes bya ba'i rnam grangs 'di bris na*81 shes bya'i gnas zhes bya ba'i sgra chos kun gyi gnas yin pa nyid du ston pa mdzad de. kun gzhi rnam par shes pa dris na de yang dri ba byas ba yin no snyam du dgongs pas so. de' i phyir 'di niskabs su ma bab pa ma yin gyi skabs su bab pa yin no.

[Der. ed. 306-a-4, Pek. ed, 367-b-8]

(2007年10月4日脱稿)

*78 Étienne Lamotto ed, p. 4 , Ch 1, II. 4～5
*79 bltas nas...avalokya
*80 Étienne Lamotto ed, p. 4 , Ch 1, I. 7
*81 bris na...dri na in Pek ed.